

生成AIの活用事例を紹介する坂口さん（中央）＝鈴鹿市白子町の鈴鹿高専で



生成AI活用法学ぶ 鈴鹿高専

新聞記事から見る鈴鹿高専

IT企業のコンサルタント講師に

鈴鹿市白子町の鈴鹿高専で今月、近年開発が急速に進む生成AI（人工知能）の活用方法を学ぶ寄付講座が開講した。同校によると、生成AIに特化した講座は高専でも珍しい。東京のIT企業「FIXER（フィクサー）」のコンサルタントが講師を務め、生成AIの活用に必要な「プロンプト」と呼ばれる命令文の作成技術などを学ぶ。

（横田浩熙）

講座は来年1月までで、1コマ90分の全15回。生成AIの特徴や得意分野などを学習し、最終的には生成AIを用いたサービスを提案してもらう。活用方法を身に付けることで、学生がデジタルトランスフォーメーション（DX）の推進に寄与することを目指す。

フィクサーはクラウドシステムの開発、運用を手がけ、対話型AIのチャット

のほかに、会員企業に勤める10人も学んでおり、互いに交流を深める狙いもある。

初回はエンジニアの坂口孝志さん（24）が教壇に立ち、生成AIの活用事例や仕組み、AIの歴史などを解説。「AI」という言葉自体は1950年代から用いられており、ブームと停滞を繰り返しながら、その性能を向上させてきたことなどを話した。開発が盛んな生成AIは常に情報が更新される分野だとし、「新しい知識を学んでもらえる講座にしていきたい」とも語った。

機械工学科3年の大川大和さん（17）は、報道で頻繁に取り上げられるAIに興味を持ち、さまざまな産業に活用できる可能性を感じて講座の履修を決めたという。実際に現場で働いている人から最先端の情報を学べるのが楽しみと話した。

最先端の情報や技術 全15回

中日新聞 2024年5月23日付 中日新聞社提供

独立行政法人国立高等専門学校機構
鈴鹿工業高等専門学校
〒510-0294 三重県鈴鹿市白子町
TEL 059-386-1031（代表）
FAX 059-387-0338
<https://www.suzuka-ct.ac.jp/>

発行



挑戦の大切さ語る

鈴鹿高専・大川さん留学経験

母校の創徳中

【鈴鹿】文部科学省の留学支援制度を活用して、米国ロサンゼルスに短期留学した、鈴鹿高専三年の大川大和さん（18）は、鈴鹿市で十九日、出身校の市立創徳中学校で留学報告会を開き、在校生約四百人を前に「挑戦」の大切さを話した。中学時代陸上競技部に

所属した大川さんは、顧問教諭の一人が男子1600リレーで東京、パリ五輪に出場した川端魁人さん（23）に中京大ク

ラブだったことから海外に憧れを持ち、留学を考えるようになった。

その後、文科省の若者向け留学促進事業「トビ



母校で留学報告会を開いた大川さん（左）と鈴鹿市三日市町の創徳中学校で

タテ！留学JAPAN」を知り、応募を決意。自動運転の最先端技術研究を留学テーマに定めて、書類選考や面接を通過すると、今年二月から三月にかけての十五日間、現地の大学に通いながら日本人技術者と交流するなどした。

報告会は自身も直面した、地方の情報格差解消の一助になればと中学時代の担任に相談して実現。留学先での一日を動画で紹介するなど分かりやすさを心がけた。今後の目標に、米国の大学院に進み、現地の企業で技術者として経験を積むことを挙げて「自分は留学に挑戦することで将来やりたいことが見つかった。皆も本気の挑戦を」と呼びかけた。

草が生えたグラウンドで、ひたむきに練習するラグビー部員たちを指導する松本さん（左端）＝鈴鹿市の鈴鹿高専で



廃部から復活 鈴鹿高専ラグビー部

廃部から復活した鈴鹿高専（鈴鹿市）ラグビー部が、グラウンドに念願のゴールポストを置ける見通しになった。設置に向け9月末まで実施したクラウドファンディング（CF）で、目標を超える290万円が集まった。呼びかけたのは1年の時に同好会から部を再興し、現在は学生監督を務める松本嶺邑さん（22）。在学最終年で「後輩に思いを託す最後の仕上げができた」と喜ぶ。

（日下部弘太）

念願のゴールポスト

CF活用 学生監督「後輩に思い託す」

「もっとコミュニケーションを取ろう」。9月上旬、炎天下の同校グラウンド。汗と土にまみれてタックルやボールキープを練習する部員たちに、松本さんが声を掛けた。要点を確認すると、部員は再び、楯円球を囲み体をぶつけ合った。

松本さんが勉強とラグビーの両立を目指して入学した2018年春。休部中と聞いていたラグビー部は、直前の3月に廃部になっていった。同好会として復活させようと教員に手紙を書いて訴え、各クラスでも仲間を募った。6月に同好会の許可が出て、翌年秋には15人制で初の公式戦をした。

だが、その後も苦労は続いた。100点差以上の大敗に、やる気をなくして辞めるメンバーも。松本さんは「勝ちたい、という自分の思いだけでやっていった」と反省を込める。全員で話し合い、3年計画で目標を立てて価値観を共有した。

21年10月、部に昇格。高専のラグビー部は全国に30チームほどあり、毎年全国大会もある。松本さんが5年生だった23年1月、鈴鹿高専は全国大会に初めて出場し、ベスト8に入った。部員も少しずつ増え、今年は1年生6人が加わって過去最多の21人となった。

た。

松本さんは昨年、5年制の本科を修了し、2年制の専攻科に進んだ。「選手時代の経験を伝えたい」と、監督としてグラウンドに立ち続けている。

残っていた大きな課題が、ゴールポストがなく、十分なキック練習ができないこと。他校での練習試合の際に借りるほか、自校では代わりにサッカーゴールを越えるように蹴って練習していた。

松本さんは社会人になる前にゴールポストの設置を実現しようとして、学校の許可を得て8月に部でCFを始めた。寄付額は25日間で当初目標の230万円に達し、残り期間ですらに60万円を上積みした。

寄付金はポストに加え、グラウンド整備などにも充てる。現主将の佐藤千洋さん（21）は「ポストを置ければちゃんとした練習試合もできるのうれしい」と感謝する。

「つらいことの方が多かったが、仲間の大切さが分かり、保護者や地域のいろんな方のおかげで全国大会にも行けた」と松本さん。初の全国ベスト4、そしてさらに上へ。ゴールポストの先に、後輩がもっとラグビーを楽しみ、強くなる未来を思い描く。

（夕刊の記事を再掲します）

中日新聞 2024年10月31日付 中日新聞社提供

「学び直して技術継承を」

鈴鹿工業高専校長 四日市で講演



講演する藤本校長＝四日市市地場産業振興センターで

社会人の学び直しを意味する「リカレント教育」をテーマとしたセミナーが6日、四日市市地場産業振興センターであり、県内の学校や企業関係者ら70人が参加した。

学び直しの体制を構築しようとして、県内の14高等教育機関と、県や経済団体、金融機関が参加する「リカレント教育プラットフォーム」が昨年度に引き続き開いた。

基調講演では鈴鹿工業高専専門学校の校長（高専）の藤本慎司校長が、高専の説明や専門の金属腐食について解説。さび対策は設備の保全に重要な一方、技術者が減

ったり専門知識が共有されていなかったりする問題点を指摘し、「学び直して技術を継承する必要がある」と語った。

四日市大、四日市看護医療大、ユマニテック短大（同市）のリカレント教育に関する取り組みの紹介もあった。

プラットフォームみえを運営する産学官金連携協議会の鶴原清志さん（三重大理事）は「企業や働く人を取り巻く環境が変化し、リカレント教育の重要性が叫ばれている。学び直しの大切さを普及させたい」と語った。

（秋田耕平）

中日新聞 2024年9月7日付 中日新聞社提供

伊勢新聞 2024年3月31日付 伊勢新聞社提供



児童らプログラミングを学ぶ

鈴鹿、日の本福祉会

【鈴鹿】県内六十六カ所の放課後児童クラブを運営する社会福祉法人「日の本福祉会」（四日

市市松原町・富士英実理事長）は三十日、鈴鹿市郡山町の鈴鹿大学で、「第二回プログラミング親子交流会」を開いた。鈴鹿や四日市、桑名市など北勢地区の日の本クラブ十三クラブに通所する児童二十九人と保護者二十五人が参加した。鈴鹿大と鈴鹿高専が協力した。

交流会は、子どもたちが将来社会で活躍するため、最先端技術のプログラミングを学ぶのが目的。昨年八月の第一回に続き、二回目となる。

この日は、同高専電工学科三年生四人の指導で、パソコンのキーボードに「かわくだり」や「ジャンケン」などのゲームをプログラミングした。また、プログラミングしたパソコンを操作し、ドローン体験を楽しんだ。

鈴鹿市内の「日の本クラブ稲生」に通所する小学三年生、渥美秀明君（九）は「プログラミングに興味があり参加した。アルファベットや数字を打ち込んでジャンケンゲームを作成した」、同高専三年生の藤本瑛太さん（一八）は「好奇心旺盛な子どもたちの理解力に感心した」と話していた。

「鈴鹿高専グローバル・キャンプ」を実施

9月9日～16日に、「イノベーションと社会実装を推進するテクノロジーの観点から考えるグローバル・アントレプレナーシップ」のテーマの下、工学教育とアントレプレナーシップ教育の融合を目指した「高専グローバル・キャンプ」を実施しました。

アントレプレナー教育の先進国であるフィンランドのトゥルク応用科学大学とメトロポリア応用科学大学から学生・教員合わせて15名の学生を招聘し、また全国15高専から27名の高専生が参加しました。なお、本プログラムはJST（科学技術振興機構）の「さくらサインスプラン」の採択を受けて実施されました。

本校とトゥルク応用科学大学は2021年11月26日に「交換留学プログラム協定」を締結し、2022年以降毎年夏に本校から学生を派遣、4月に本校への学生受入を



行っています。今後とも鈴鹿高専は短期プログラムと実際の派遣・受入を組み合わせ、国際交流を推進し、深化していきます。